新刊紹介

伝道院研究部編
『真宗教学研究』第二集・第三集

本書は、伝道院の機関誌である『伝道院紀要』第一号から第十五号までに掲載された百十三篇の論文の中から、伝道院に籍を置かれた方の論文を原則として一篇ずつ二十三篇を選んで出版されたものである。

伝道院は、本派本願寺において昭和三十七年四月、時代に即応する教学の樹立と伝道についての有為な人材の育成を目的として設立された。院内には研究部と研修部が置かれ、研究部では週一回の研究会、龍谷大学・勧学寮との合同研究の外、各種の調査研究も行なわれている。研究部の活動は、現代における浄土真宗を問うものであって、「平和問題」「靖国神社問題」「真宗の倫理」「教団問題」等々がテーマとして取り上げられ、真宗学・仏教学は言うに及ばず、哲学・宗教学・心理学・社会学などの各分野からも積極的に論議研究がなされ、その成果が『伝道院紀要』として公にされているのである。又各種の調査は、「門信徒の宗教意識調査」「神社に対する意識調査」「創価学会」「実践倫理宏正会」等多方面にわたり、これらは別に『研究資料』として報告されている。一方研修部においては、住職研修・門徒幹部研修・布教実修などの活動が行なわれ、テーマとしては「住職像の探求」「生活の中の信仰」「教化の諸問題」などで、より一層身近かで実践的な事柄までをも論議され研修されている。

伝道院の活動内容のほんの一部を見ただけでも十分に推察できるように、そこでは現代に生きる真宗人が等しく問題としなければならない事を、単に一般に解答を提示するといった姿勢ではなく、問題の本質を見きわめ、その上で親鸞教学の根源にまで立ち返って方向を見い出してゆこうとされるものであり、尚かつ、その成果をいかに実践し現実に実りあるものとしてゆくかが模索されている。このような姿勢は、本書に収められた論文からも十分に窺うことができる。

例えば、「靖国神社法案の問題点」（第三集所収）を論じておられる佐竹温知氏は、靖国神社が常に宗教と切り離されて「一般的国民感情」又戦前においては「国民道徳の根源」として位置付けられ、その故に信教の自由を侵すものとはならないと強弁されてきた事実を指摘される。その上で、明確な教義体系を持たない神道ではあるが、それは日本においては国民感情に根ざした宗教であることを明確化され靖国神社問題の持つ意味を明らかにされる。ところが著者は、このことを明らかにすることで事足れりとはされない。靖国神社の国家護持を支持する国民感情、即ち英霊を祀り先祖を敬う心が現在の真宗寺院を支えている基盤であり、寺院の側もそれを積極的に支持している事実を指摘され、「教団では第一に儀礼という面より、第二に末寺のおかれている社会構造という点より、教団全体が一致して靖国神社法案絶対反対という方向をたどることが困難ではないかと危惧される。」（131頁）と言われる。靖国神社問題に反対しようとすれば、真宗寺院の存在基盤を崩壊せしめずにはおかないのであり、教団・寺院のあり方を本来の姿に戻さない限り「戦前の歴史がそうであったように、

最初相当強く反対の線を打出したとしても、次第に政治的な力と妥協し、反対の線もうすらぎ自己防衛的姿勢になって行く」（131頁）と結論される。反対の運動は、正に「靖国神社反対を通じて自己の体質改善を図ろうという大きな流れの中でその運動を展開すべき」（127頁）であって、必然的に自己の姿勢が問われ体質の改善を迫られるのである。より一般的には、現代の問題に真に関わりを持とうとするとき、必ず教団の純粋化が要請され、それなくしては批判の根拠を持ち得ないことを指摘されるのである。

又さらに、現代教学の樹立を果そうとするとき、ただ教団の純粋化だけではなく教学の純化、言い換えるならば教学を思考する者の質も問題とされざるを得ない。宗教の現実への対応という困難な問題は、えてして安易な方向に合理化されがちである。「他力信心の位相」（第二集所収）において山崎龍明氏は、この問題を明確に指摘されている。即ち現代における宗教を論ずるとき、安易に世俗社会に順応しようとする傾向に対して、「世俗主義をただの一歩も超えるものではない。ここに在っては仏教のもつ本質は著しく踏みにじられ、仏教の超越性＝超歴史性は完全に阻害されて道徳に内在化されてしまう。」（274頁）と批判される。しかし一方超越性を強調するとき「たとえば浄土教の歴史の中で超越性を単なる理念として強調するあまり、歴史性＝現実性を全く無視してしまうというようなことが少なからずあった。」（275頁）と指摘されるように現実無視となりがちである。現代教学の樹立は「われわれが歴史性を重視するあまり歴史に埋没しがちだという現実と、逆に超歴史性を強調することによっておかされがちな歴史性の無視という両面の隘路を超克する」（276頁）ことでなければならないと言われる。「平和問題の教学的序説」（第二集所収）において佐藤三千雄氏は、親鸞教学がいかに平和問題に関わりを持ち得るかを論じられる中で、「両面の隘路」が宗教にとっていかに克服し難い問題であるかを指摘される。そして真宗人の態度について、「宗教倫理と社会倫理、慈悲と正義の二元性について、明確な意識を持つべきである。そして両者の緊張のなかに身を置くべきことを意味する。歴史の状況はいつでも二義的である。われわれはそのような状況に対して、間違いのない具体的な指示を、どこからも（聖教からでも）受取ることはできない。」（67頁）と示唆される。即ち、現代に対する正しい対応はきわめて困難であり、しかも他のだれかによって、たとえ親鸞によるとしても解答の与えられるものではない。それ故現代に生きる我々一人一人が、この課題を荷って生きることによって始めて現代教学がそこに提示されてくると言われるのである。

伝道院において現代教学の樹立が、どのような姿勢で考えられているかを三部の論文を通して窺ってみたのであるが、もとよりこれは伝道院活動のほんの一部の紹介である。他の論文に於てもそれぞれに我々の当面する問題を明確に意識化し多くの示唆を与えてくれるものである。是非ともに一読されることを強くお励めしたい。本書は『伝道院紀要』のバックナンバーを求める声にこたえて出版されたよしであるが、書物となってより広く一般に公やけにされたことは、私達にとってもこの上ない幸せである。

尚『真宗教学研究』第一集は、一九七一年に伝道院研究部が編集出版された論文集の改定再版である。

（昭和五十五年九月　永田文昌堂　A五版　各巻平均三〇〇頁四〇〇〇円）

（和田真雄）